

～“地域との繋がり”と“KEEP FARM”の理念を貫く大規模経営体～

名	称： ^{のなか たもつ} 野中 保
事業名（年度）	：地域担い手経営基盤強化総合対策実験事業（平成21年度）
事業実施主体名称	： ^{いずみし} 出水市担い手・地域営農対策協議会（鹿児島県）
内 容	：田植機、トラクター、籾摺り機、フレコンバックスケール、 ブームプレイヤー、野菜移植機、マルチ機、格納庫
事 業 費	：21,931千円（国費：6,245千円）

1 事業取組前の状況

(1) 経営規模（平成20年→現在（平成25年））

- ア 水稲 （ 15ha → 17ha ）
- イ 麦 （ 7ha → 10ha ）
- ウ ばれいしょ （ 3.5ha → 1.3ha ）
- エ キャベツ （ 1.5ha → 3.5ha ）
- オ 作業受託 （ 7ha → 50ha ）（耕起、田植え、薬剤散布、刈取、乾燥）

(2) 経緯等

- ・ 高校卒業後、家業を継いで就農。元々、米と葉たばこの経営であったが、昭和48年に種麦の産地指定を受け、麦を加えた経営にした。しかし、葉たばこは将来性がないと判断し、期間借地（水稲裏作）による麦作の拡大に努めてきた。
- ・ 以来、“地域との繋がり”を重視した取組によって、出水市でも代表的な地域の担い手として、大規模土地利用型農家となる。
- ・ 米、麦の面積拡大に加えて、露地野菜による複合経営を図るため農業機械等を導入した。
- ・ 平成25年1月、息子の^{ゆういち}祐一氏に経営移譲し一線を退くも、生産面でのアドバイス等を実施している。



△ 野中 保 氏

2 取組の概要

- ・ 地域一体となった農道・水路管理、ブロックローテーションや古い祭りの復活などに尽力し、公民館長を6年務め、地域からの信頼が厚い。地域からの信頼を得ることで、地域の農地の受け皿となり、その結果、規模拡大に成功した。
- ・ 規模拡大に伴い、ほ場の分散化が課題となったが、相対による交換分合を行うなどで解消し徐々に団地化を図っている。なお、分散錯ほの解消は、今後も規模拡大を進める上での重要な課題と考える。



△ 小学校と協力し、被災地に米を寄贈（水田を提供）

- ・ ばれいしょは大手業者と契約栽培を行っており、キャベツは青果市場との契約及びカット加工業者と契約するなど、経営の安定化を図っている。
- ・ 後継者の祐一氏もキャベツの共同出荷を行う若手農家（新規就農者を含む）の集まりである「絆グループ」の中心的存在となっている。
- ・ 妻のかずえ氏は豚味噌等の味噌の加工を行い、直売所等で販売している。さらに、「絆グループ」と一体となり、事業を検討している。



△ 新車のように整備された車体には“KEEP FARM”

3 経営改善の効果

- ・ 地域の担い手として、今では、頼まれる農地や農作業を積極的に引き受けるとともに、農業機械の導入により農作業を効率化し、円滑に規模拡大を図っている。
- ・ 露地野菜を加えた経営の複合化を図るとともに、契約栽培や直販（デパート・スーパー等）により販路を拡大することで、経営の安定化を図っている。
- ・ 米は、乾燥調整施設等を導入したことで、例えば、袋詰め作業にはこれまで最低3人が必要だったのが、1人で済むようになるなど、効率化が図られている。

4 成功の要因

- ・ “地域との繋がり”を重視したことでお互い信頼を得たことが最大の要因と認識している。信頼を得ることで規模拡大やほ場の団地化、耕畜連携ができ、さらには、農繁期における雇用の確保（ばれいしょ収穫時には総勢24名）を可能とした。
- ・ 同じ機械を使い回せる作物に絞ることで効率的な作業を可能とした。また、農機メーカーと連携し、複数の農機のアタッチメントのジョイント部を統一化することで、ワンタッチでセッティングが可能となり、作業を効率化した。
- ・ 出荷時期が他県と競合するものは作らず、地理の特性を活かした生産に努めている。
- ・ 行政、JA等からの信頼も篤く、減農薬等の新技術や新品種を積極的に取り入れており、地域への普及の役割も果たしている。さらに、県の普及指導員の農家研修の受け入れなども行っており、地域農業の発展に大きく寄与している。



△ 格納庫の中には整然と農業用機械が並ぶ

5 今後の経営改善の方向

- ・ 中学生の孫からも「農業をやりたい」と言われて感激している。地域農業を孫の代に引き継ぐことが責務であると情熱を抱いている。
- ・ 野中氏は、農業は、“作物を作ること”や“地域の助け合い”が最優先だと考えてきたが、息子から経営者としての視点も重要だと言われ、そのような時代になったと認識を新たにしている。